

# 2008年度 大谷大学教育後援会文芸奨励賞 「いま伝えたいこと」50字表現 入賞作品発表

今年度、大谷大学教育後援会「文芸奨励賞」の入賞作品を発表します。この賞は、在学生を対象に文芸作品を募集し、言葉による表現意欲を奨励することを目的にしています。

今年度は「いま伝えたいこと」をテーマに50字以内で表現していただきました。今回、167名の方から応募が寄せられ、選考の結果、次の方々が入賞されました。

表彰式は、12月2日(火)「尋源講堂」において行われました。

**最優秀賞** 該当者なし

<b>優秀賞</b>	菊池 洗人 (史学科 第2学年)	笹井 雄太 (哲学科 第2学年)
<b>佳作</b>	青山 真之 (哲学科 第1学年)	安齋 知枝 (哲学科 第3学年)
	泉谷 京子 (哲学科 第1学年)	北風 遼 (哲学科 第4学年)
	清水 浩基 (社会学科 第1学年)	辻井 昌代 (歴史学科 第1学年)
	藤原 友則 (修士・真宗学専攻 第2学年)	

〔最優秀賞〕 該当者なし

〔優秀賞〕

菊池 洗人

(文2・史)

僕は漢文が読みたくて大学へ来た。  
だから僕は漢文を読む。  
好きな事をやる理由は単純なんだと思った。

〔優秀賞〕

笹井 雄太

(文2・哲)

昔は嫌いだったものが  
いつのまにか好きになっていた  
  
どうにもできないことだから  
今の気持ちは大切なんだ

〔佳作〕

青山 真之

(文1・哲)

恥ずかしくて声をかけられない僕に  
声をかけてくれた。  
君の声がなかったら  
今も1人ぼっちだろう  
ありがとう。

〔佳作〕

安齋 知枝

(文3・哲)

お父さんお母さん  
この間は遊びに来てくれて  
ありがとう  
あと一年ちょっと悔いのないよう  
私、頑張る。

〔佳作〕

泉谷 京子

(文1・哲)

ありがとう  
100万回言っても足りんわ  
出会えてよかった  
はいはいってまた流されそうやけど  
ほんま、大好き。

〔佳作〕

北風 遼

(文4・哲)

この夏、内定をもらえた。  
  
難しいと言われた希望の「ものづくり」  
の技術職。  
  
この機会、絶対に逃したくない。

[佳 作]

清 水 浩 基

(文1・社)

わからない。  
ずっとわからないままだった。  
そして、たぶんこれからも。  
だって、そのほうがおもしろい。

[佳 作]

辻 井 昌 代

(文1・歴)

「さよなら」を言えるまでどれだけ  
時間がかかったことだろう。今なら  
「ありがとう」が言えるでしょう。

[佳 作]

藤 原 友 則

(院修2・真)

生きることに意味を求めなく  
ても生まれてきたことに意味  
はあるんだよ。

## 文芸奨励賞の願い

人間は、「文字」の発明により、時空を超えて互いの意志を伝えることが可能になり、また数多くの先達の優れた文化的業績が書物として残されてきました。

「文字」には、感情や思いがあり、温もりや重みを感じられます。電子メール全盛期の現代社会ですが、近年、地方自治体や教育現場でも、「短文」や「絵手紙」が自己表現の場として、また豊かな感

情表現の場として、その取り組みが盛んになってきました。そこには薄れつつある家族関係・人間関係の絆を取り戻したい、再構築したいという願いが感じられます。

さて、大谷大学教育後援会学生支援事業の一つとして、今年も「いま伝えたいこと」をテーマに学生諸君に作品の投稿をお願いしました。昨年を上回る167編の応募がありました。それぞれの作

大谷大学教育後援会会長 今川 雅照

品に、個々の人生観や人間観が凝縮されており、応募作のいずれもが力作揃いで、各自の思いが、温もりが十分に伝えられる作品だったと思います。最優秀作は今年も選出されませんでした。優秀作2編、佳作7篇が選出されました。

今回応募されなかった方々も、友に、家族に、そして自分自身に「いま伝えたいこと」、大切にしてください。

## 文芸奨励賞「いま伝えたいこと」講評

大谷大学教育後援会文芸奨励賞は、今年度で3年目の企画になりますが、今回は過去最多、167名の方から応募がありました。この賞の存在が、少しずつ先生方や学生諸君に浸透してきたということでしょう。

選考は、教育後援会会長と学内3名の先生方をお願いしました。その結果、優秀賞2点、佳作7点選ばれました。多数の応募がありましたので、各選考委員の先生方には一気に全作品に眼を通していただき、特に強く印象に残ったものをまずは候補作として提示していただきました。その後、提出された作品を全員で吟味し、各賞を決定していきました。

167もの中で眼にとまる作品とは、やはりストレートに心に響く力をもった言葉ということになるのでしょうか。あまりに難解なものや逆に稚拙なもの、また、誰に対して何を伝えているのかよくわからないものは、早い段階で自然と淘汰されてしまいました。

優秀賞の菊池さんの作品は、読んでおわりの通り、真っ直ぐ心に入ってきた作品です。力強くも淡々とした言葉に、彼が言わんとする「単純」さが際立っています。それに比べて笹井さんの作品は、少しひねりが加えられたものと言えます。菊池さんの作品が一度で心に届くとするなら、笹井さんの作品は二度読ませる力を持った

学生部長 木越 康

作品と言えるでしょう。タイプの違った2作品が、優秀賞として選ばれました。

その他の入選作についての講評は割愛いたしますが、それぞれ読むものに何かを訴えかける力を持った作品であると言えます。

昨年に引き続き、残念ながら「最優秀賞」は該当者なしということになりました。それは、今回選出された受賞作品が最優秀賞としてふさわしくないということよりも、他の作品と比較して突出したものを感じられなかったということになるのでしょうか。来年は、多くのなかにもキラリと光る、際立つ作品の応募が期待されます。